



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

主日の説教

今日のみことば

年間第17主日 C年 (2022年7月24日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：創世記 18章 20 — 32節

第二朗読：コロサイの信徒への手紙 2章 12 — 14節

福音朗読：ルカによる福音書 11章 1 — 13節

## しつように頼めば

今日の第一朗読は、先週の第一朗読の続きとなります。『創世記』18-19章では旅人が訪れてもてなしを受けるといふモチーフがあります。アブラハムがもてなした様子は先週の朗読箇所でした。19章ではソドムという町でロトがもてなします(19章1節)。アブラハムのもてなしに対して旅人はイサクの誕生を予告しますが(18章10節)、ロトのもてなしに対してはソドムの町の滅亡が告げられます(19章14節)。アブラハムもロトも、どちらも、旅人の姿で現れた主なる神さまと対話をします。アブラハムは主にソドムのために救いを乞い願います(18章16-33節)。一方でロトは自分のいのちの救いを願います(19章18-22節)。

アブラハムに給仕され、もてなしを受けた三人の旅人は男の子の誕生を約束して出発します(18章16a節)。そのうちの二人がソドムに到着するのです(19章1節)。その到着の前に、見送りに来たアブラハムとソドムの町を見下ろす所で会話を交わします。それが今日の朗読箇所となります。

23節から32節で、アブラハムは6回にわたって質問をし、主なる神さまも6回答えています。聖書では3回繰り返されるものですが、ここでは6回も繰り返されます。執拗なアブラハムの願いを見てとることができます。

アブラハムの質問の意図は正しい者と悪い者とが一緒に裁かれるべきではなく、両者は区別され、悪い者だけが滅ぼされるべきであるというものです(23節)。しかし、24節で正しい者が50人いたら、町を救うべきであるという主張へと変化している点が興味深いです。

32節の「主よ、どうかお怒りにならず」はアブラハムの心情を表しているように思います。主なる神さまに何かを語れるような存在ではないけれども、甥のロトに助かって欲しいという思いがあるからこそ、あえてアブラハムは「主よ、どうかお怒りにならず」と語りはじめるのです。この意図を主なる神さまはこころに留めて、ロトを破滅のただ中から救い出します。「こうして、ロトの住んでいた低地の町々は滅ぼされたが、神はアブラハムを御心に留め、ロトを破滅のただ中から救い出された」(19章29節)。

第二朗読では14節の小さな言葉「取り除く」に注目してください。これは、ギリシア語のアイローですが、もともとの意味は「持ち上げる、取り上げる、拾い上げる」です。そこから出発して十字架やくびきを「持って行く、運ぶ」の意味が生じます(マコ8章34節、マタ11章29節参照)。さらに「取り去る、片付ける、取り除く」の意味も生じます。群衆がイエスさまを十字架につけて「殺せ」と叫ぶ場面でもこのことばが使われます。人々はイエスさまを「取り去れ」と叫んだのです。そう叫んだ人間の罪は、イエスさまが十字架につけられることで神さまは「取り除い」てくださったのです。

福音朗読は主の祈りの箇所からです。8節の「しつように頼めば」を心に留めてください。ギリシア語原文はアナイディアだそうです。新約聖書ではここだけに使われる言葉だそうです。「適切さへの感覚の欠如、他人が述べたよい意見に対する不注意さ、恥知らず、でしゃばり、ずうずうしさ、しきたりに対する無知」などの意味があります。日本語で「しつよう」とは頑固さ、しつこさという意味合いの強い単語です。しかし、ギリシア語のアナイディアにはその意味はなく、むしろ「破廉恥」、「恥知らず」の意味合いが強いようです。

福音朗読の本文中の「しつように頼めば」はギリシア語を直訳すると「アナイディアのために」となります。それで、パンを貸して欲しいと願った人のアナイディア「恥知らず」、真夜中に他人を起こす「恥知らずな態度」という理解ができるでしょう。つまり、パンを願った人の「ずうずうしさ」です。

しかし、一方で眠っている者のアナイディアとも理解できるでしょう。なぜなら、隣人への親切な関わりを大切にするユダヤ人社会にとって、ベッドに入って寝ている者は「友達だからという」理由では起きてこないでしょうが、ホスピタリティのない「アナイディア、恥知らず」と言われなければならないために起きて与えるという意味でも理解できます。戸口に立って願う人のアナイディアであれば、神の前に立つ人間の取るべき態度となるでしょうし、寝ている人にとってのアナイディアであれば、人間に対する神の態度となります。

## 説教：堂々と祈りましょう

ミサの中で主の祈りを唱える前には、司祭はたとえばこのような言葉で会衆を主の祈りに招きます。「主の教えを守り、みことばに従い、つつしんで主の祈りを唱えましょう」。皆さん、よくご存知だと思います。ミサの式次第のラテン語規範版や、各国語版を見ても、「つつしんで主の祈りを唱えましょう」が、例えば英語では We dare to say となっています。直訳すると「あえて、思い切って、おそれずに祈ります」となります。「つつしんで主の祈りを唱えましょう」はとても日本的な表現で美しいのですが、「あえて、思い切って、おそれずに」という意味が薄れてしまいます。主の祈りは「堂々と」祈ってよいのです。

今日の第一朗読でアブラハムは「主よ、どうかお怒りにならないで」と願いを続けています。また、さきほど申しましたように福音での「しつように頼めば」は「ずうずうしく頼めば」の意味でした。

主の祈りを唱えることができるのは、キリスト者の特権です。それは洗礼に由来します。洗礼のおかげで神さまの子どもとさせていただいて、神さまに向かって「父よ」とあえて、堂々と、おそれずに、しかもずうずうしく頼むことができるのです。